

中世後期日本の実質賃金

— 変動と格差* —

斎藤修・高島正憲

本論文では、日本の中世後期における実質賃金の計測を通じて当時の労働市場のあり方を検討する。既往の推計とは異なり、熟練・非熟練の別に加えて、中世日本に特徴的な銭払と米払という支払形態の別、および精銭とビタ銭が混在した銭市場をも検討の対象とし、とくに貨幣市場の変動とそれに影響された物価の動向が、どのようなインパクトを実質賃金水準に与えたのかをみる。通貨供給を渡来銭に依存していた中世日本では、15世紀から流通通貨の品質による銭の階層化が発生し、1560年代後半には大陸からの通貨供給が途絶して銭市場が混乱をしたが、この間、労働市場では2つのことが起きた。一つは貨幣賃金の底上げという長期的な変容、もう一つが16世紀後半に起きた米払賃金への切換という短期的な反応であり、どちらも熟練労働者にみられた現象であった。本稿では、それらの結果として生じた賃金格差の変化をも明示的に算出し、その変化と実質賃金水準の変動との間にはどのような関係がみられたのかを明らかにする。

JEL Classification Codes: E31, J31, N35

1. 問題の背景

日本の歴史において中世は、資料の扱いが難しいことから数値化にもとづいた研究の遅れた時代である。そのなかで、律令時代と徳川時代をつなぐために中世の一人あたりGDPを推計した高島(2017)、高島・深尾・西谷(2017)、そしてBassino, Broadberry, Fukao, Gupta and Takashima(2019)は例外的な存在といってよい。いずれも基本的に同一の、一人あたり実質農産物需要の推計値からの試算で、その需要推計は非熟練労働者の実質賃金、すなわち貨幣賃金を米価で除して得られた米賃金(rice wages)に依拠したものであった(以下、便宜上、このGDP推計チームの成果を高島推計と呼ぶ)。供給側の資料が絶対的に不足している時代にかんしては賃金・物価データが有用だからであり、非熟練労働者に限定したのは、当時の国民一人あたり農業生産需要に近いのは熟練職人の賃金収入ではないという判断があったからである。依拠したデータは、銭払賃金と米価のどちらも国立歴史民俗博物館「古代・中世都市生活史(物価)データベース」(歴博データベース)から作成さ

れたBassino, Fukao and Takashima(2010)の加工データで、京都における非熟練労働者の銭表示賃金事例が利用された(高島2017, 96頁)¹⁾。

ここでの主題は、その実質賃金系列一本に依存したGDP推計の方法とその結果が適切であったか否かを論ずることではない。そこに描かれた長期にわたる実質賃金の時系列は、1450年から1600年の間に一人一日米1升から2.1升へと、水準の明瞭な上昇があったことを示唆しており、それ以前の150年間と対照的であり、興味深く、また中世経済史家に新鮮な印象を残す。ただ、中世における労働市場の問題としてみたとき、この一本の時系列だけで多くのことを語るのは難しい。同じ賃金・物価データベースから、当時の労働市場のあり方についてもう少し立入った分析ができるからである。すなわち、熟練と非熟練という労働市場の階層性を前提に、実質賃金は同じように推移したのか、とくに15-16世紀に起きた貨幣市場の混乱と変容がそれぞれの階層の実質賃金収入にどのような影響を与えたのか、賃金の支払い方に変化はなかったのか、その結果として格差構造に変化がなかったのかどうか、これらの検討によって中

世労働経済の諸側面を明らかにすることが、本稿の目的である。

歴博データベースには、非熟練以外にも種々の職人賃金データが含まれている。それらの賃金の大部分は銭払である。ただ、サンプル数は少ないが一定数の米払の事例もみられる。中世前期には多くが米払であったが、14世紀からは銭払が一般化したとみられてきた。しかし、1570-90年代奈良の事例に依拠した桜井英治の興味深い論稿によると、大工(「番匠」)は再び米払になっており、しかも観察期間を通じてその水準に大きな変化がなかった。「賃金は銭から離れて米建てでの安定化(一日約1斗)に向かっていた」ようなのである(桜井2017d, 244頁; 田中2007, 112頁)。これは、高島(2017)らの観察とは異なった印象を与えるファインディングである。

この背景には中世後期に生じた貨幣市場の混乱があった。13世紀に起きた宋銭の大量流入、15世紀における明銭の輸入とビタ銭の登場、そして1560年代後半に入って突然生じた渡来銭の途絶と混乱という一連の変化である(黒田2014, 第5章および補論)。とくに最後の時期には、銭に代わって米遣の拡大という、それまでのビタ銭対応とは異なった変化が生じたことがわかっている。日用品の取引や土地売買だけではなく、賃金支払においても米遣が急速に拡大したのである(浦長瀬2001, 第1章)。いいかえれば、1570年前後からの四半世紀は、精銭価値の凋落、ビタ銭価値の上昇、そして米遣いの拡大という、急激な変化が起きていた時代であった。ただ、低位銭の利用が急進した一方で、精銭を基準として物資や賃金の「価格」を計る慣例は相当遅くまで遣ったと想定される(毛利1974, 上, 64頁; 高木2010, 259-61頁; 桜井2017d, 224頁)。また、精銭が使われなくなっても直ちにビタ銭がかつての基準貨幣と完全に等価となったわけでもなかった(桜井2017d, 225-30頁の表参照)。米払自体は基本的に京都周辺と西日本における現象で、東日本では生じなかったが、畿内の労働市場を考えると、以上のような貨幣市場において生じた変化

を考慮に入れなければ、賃金の銭払と米払の問題は理解できないと考えるべきであろう²⁾。

以上2つの理由で、中世における実質賃金推計の試みはその時代の労働市場を多面的に把握することを要請しているといえよう。本稿では、(1)歴博データベースの再点検を行い、(2)熟練労働者の賃金と米払賃金を実質賃金計測の対象に加える。そのうえで、(3)13世紀末から1600年までのビタ銭使用による貨幣価値の変化を考慮に入れた、熟練・非熟練別、局面別の実質賃金推計とその変化率、および熟練・非熟練間格差の再検討を試みることにしたい。

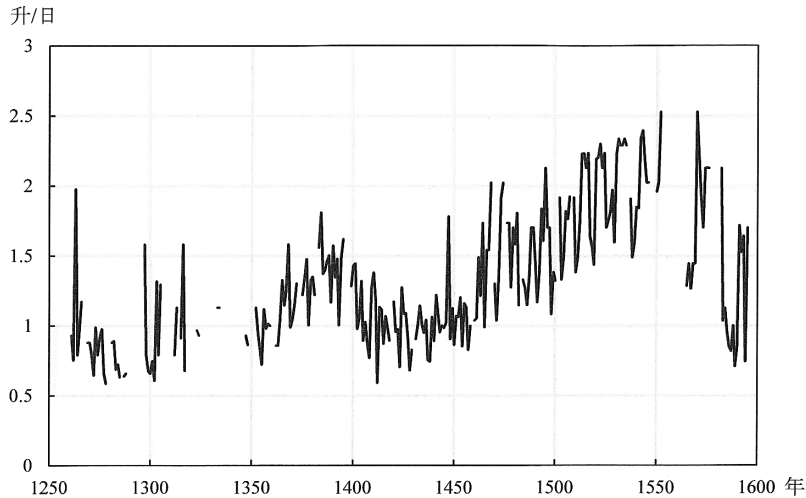
2. 賃金と米価

2.1 賃金データ

歴博データベースから得られる賃金は手間賃である。「手間」(作料ともいう)には賄を含まず、技術的な理由で——場合によっては需給状況によって——支払われることとなった増手間(増作料)も含まれなかった。賄が必ず支払われたのに対し、増手間は払われたり払われなかったりと、個別事例によって異なった。また、支払われたときでも、割増率はばらばらであった。たとえば高野山金剛峰寺の天野社における1445年と1464年の工事記録をみると、番匠(大工)や葺士(屋根葺)といった熟練職人の手間賃はいずれの場合も一人一日あたり100文であったが、増手間(増作料)は修理工事の内容によって、あるいは職人の職階を限定して、26文、35文、80文と異なった料率が記されていた(遠藤1985, 194-95頁)。また、二人びきの大鋸引は手間賃自体が120文と建築職人の2割増であったが、1512年の談山神社大講堂造営工事では、20文の加算がなされていた(大河1971, 165頁)³⁾。

高島推計では、京都における非熟練労働者に限定し、一人一日あたりの(増手間を含まない)手間賃が計算できる事例をすべて採って実質系列を作成した。それを再掲すれば、図1のとおりである。四半期を単位とした上下動は認められるものの、15世紀第2四半期から16世紀第3四半期までの長い上昇期と、同第4四半期に

図1. 京都における非熟練労働者の米賃金, 1261-1595年



註) 高島(2017), 96頁の図2-1に同じ。ただし, 1600年まででそれ以降を含まず, 米の単位をkgから升到換算した(1升=0.9405kg)。

出所) 歴博データベース。

入ってからの急激な下降と世紀末の揺り戻しが目を惹く。この年代記はほぼ米価によって規定されており⁴⁾, それゆえ, 長期にわたるデフレの後, 1570年代にそれが反転し, インフレになったことが含意されている(神木1980)。

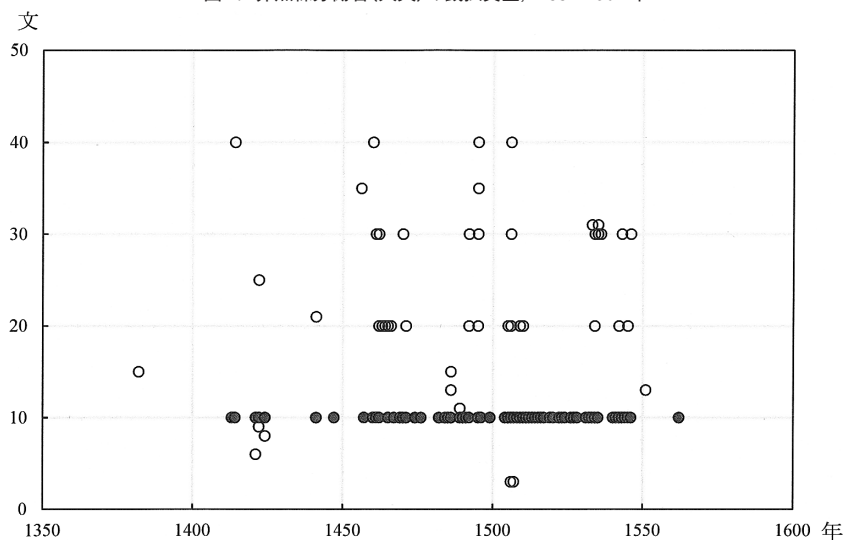
この非熟練賃金データを歴博データベースまで遡ってみてみると, 一人あたり賃金が計算できる事例のなかには10文という低い水準であった場合が非常に多く含まれている一方で, それよりはずっと高い値, たとえば50文, 100文, 110文となるケースも存在していることがわかる。これは, 一つにはデータベースにおける作業人数と日数の情報が不完全だったから, とくに徒弟や年少者(「童」)のような見習工や雑業者への配分が労働編成の記録から抜けていたからかもしれない。また, ビタ銭遣いの拡大とともに額面は同じでも価値は低いビタ銭払のケースが混入していたことも考えられる。もう一つの可能性として, 非熟練として括られる職種のなかに技能の種類や作業内容が異なるグループが混在していたこともありうる。たとえば, サンプルには「河原者」と呼ばれる労働者グループが含まれていた。彼らは被差別民とみなされることが普通であり, 多くは行刑役や屠畜・皮革加工に従事したかもしれない。しかし室町時代には, 彼らのなかから特殊技能を有する職人, とくに庭師が台頭し,

善阿弥のように將軍家に重用され, 高賃金を得る御庭者も現れた(脇田2002, 第3-4章; 林1995)。実際, 歴博データベースには河原者で熟練建築職人並みの賃金が支払われていた場合が含まれており, その仕事内容は「庭木」や「築垣修理」などの作庭師的作業に従事していたことが記されている。

そこで, 職業名が人夫である場合に限定, かつ50文以上を外し, 他方では減少した事例数を増やすために, 同じ畿内の奈良のデータを加えて, 全事例を年次別にプロットする(図2)。20文や30文のような特殊ケースが少し存在するけれども, 図中でマーカーを塗りつぶしにした10文が全体の81%をしめる(最頻値も中位値も10文である)。しかも, 1世紀半にわたりその水準で変わることなく推移してきたことが明瞭である。これは, 精銭建で10文というのが長い間人びとにとって標準的と考えられた手間賃の水準だったことを意味している。

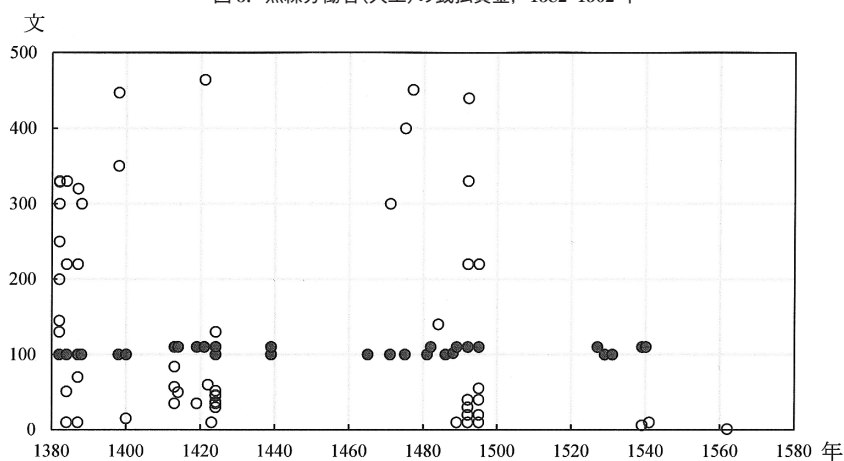
熟練職人にかんしても数多くの事例が存在し, 同様の作業をすることができる。ただ, 非熟練とは異なって職種の別が明瞭で, とくに大工の数が多い。そこで, 図2と同じく京都に奈良の事例を加え, 計算上500文以上の極端な賃金率となる場合を除いた大工手間賃の散布図を図3に示す。

図 2. 非熟練労働者(人夫)の銭払賃金, 1382-1562 年



註) 人夫に限定し, 50 文以上を除く, 塗りつぶしは 10 文の場合。
出所) 歴博データベース。

図 3. 熟練労働者(大工)の銭払賃金, 1382-1562 年

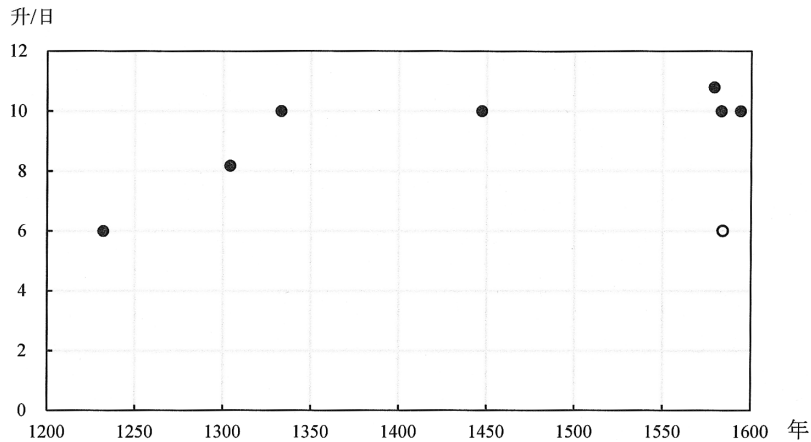


註) 大工に限定し, 500 文以上を除く, 塗りつぶしは 100-110 文の場合。
出所) 歴博データベース。

大工の場合, 非熟練の人夫よりもばらつきが大きい。大工賃金は棟梁に一括して払われることが多かったため, 人数が不正確であったり, 概数であったり, あるいは徒弟や童が混じっていたりすると, 計算上の賃金率が過大になったり過小になったりするからであろう。それでも, 塗りつぶしにしたプロットからわかるように 100 文から 110 文の幅に集中する(最頻値と中位値は 110 文)。この僅かな幅の間に 46% が含まれ, しかも 15 世紀中に最頻値が 100 文から 110 文へ移行したことが窺える。この貨幣賃金

の標準的水準がゆっくりと上昇——桜井の表現を借りれば「その重い腰を上げて上昇」(桜井 2017c, 219 頁)——したことが, 非熟練の場合との目立った違いとなる⁵⁾。この上昇の原因をエヴィデンスにもとづいて確定することは難しいけれども, 労働市場の需給事情による増し間賃の事例が増えるにつれて, その勢いが次第に手間賃自体の水準にまで及んだと解釈できるかもしれない。14-15 世紀に有力寺社を雇主とする大工が職の保障をめぐる相論を起こしていたこと, さらに彼らの「座」が集団で罷業をおこ

図4. 熟練労働者(大工)の米払賃金, 1232-1433年



註) 1. 一例を除きすべて大工。1447年のみ杣工。
 2. 1232-1447年までの4例が歴博データ(3例は地域不明, 1447年の杣工は播磨)。16世紀の4例は多聞院日記による奈良の事例。
 3. 1584年の白抜き(6升)は「凶作」ゆえと注記あり。

出所) 歴博データベースおよび桜井(2017d), 245頁。

なうなど、この時期、雇主が職人に対する選択権を失ってきており、職人が雇主に対して優位な立場にあったことが指摘されている(桜井1996, 第1部第1-2章)。その結果、賃金にかんしても熟練職人は雇主に対してかなりの交渉力を有するようになったのではないであろうか。実際、1563年、伊勢神宮外宮造替工事にあたり杣山での工作手間賃として総額500貫文を提示された工匠たちが納得せず、200貫文の増額を勝ちとった事例(大河1971, 142-44, 171頁)、また河原者ではあるが、熟練職人並みの手間賃を得ていた造園師が200疋(2,000文)増額してもらった1462年の事例(林1995, 18頁)などが知られている。

次に、歴博データベースに現れる米払賃金の水準と変化を検討しよう。最初に非熟練からみる。データベース中の事例は非常に少ないというわけではないが、すべてが1450年以前で、ほとんどが播磨国であること、また一人あたりの水準が非常にばらついている。人数と日数が判明する事例に絞ってプロットしてもばらつきは大きく、しかも特定の水準に集中するということがない。グラフは省略するが、銭建で10文に対応する米払賃金は検出できないのである。

これに対して熟練の場合は、事例数が限られるものの、大工職に絞れば米賃金の水準と傾向

を容易にみてとることができる。ただし、歴博データベースからはあまりにも事例が少ないため、桜井(2017d)によって多聞院日記からの事例を補った。その結果、13世紀末から16世紀末までカバー可能となる。その図4からわかるのは、13世紀の6升という水準——田辺・渡辺(1949)によれば、それが律令時代以来の相場であった——が1300年あたりから上昇、14世紀前半には10升(1斗)に達し、その後は2世紀余にわたってその水準に留まったということである。例外は16世紀後半の2例で、1584年が極端に低かったのは、その年が凶作であったため米価が騰貴し、被用者と合意のうえ6升で契約したからであろう。もう一つは1579年の10.8升である。これは標準額に対して8%という小幅の割増なので、何らかの個別事由があった特殊例と思われる。いずれにせよ、大工の米建賃金は1斗という観念が14世紀に出来上がり、16世紀後半においても変わらなかったと解釈できる。

2.2 米価と貨幣要因

歴博データベースからは、すでに高島(2017)と高島・深尾・西谷(2017)とによって米価系列が作成されている。京都に加えて、大和・山城・播磨もカバーした系列である。これには事

例数を確保するために若干不確かな事例も含まれていたが、取引量と支払総額がともに判明するケースのみにするとサンプル数が少なくなるため、3か年平均系列を採ることによって一定期間安定した標準値である賃金系列に対応させることとする。

その米価系列によれば(後掲図6における実線のグラフ)、1430年代から1550年前後にかけて長いデフレの時代があったことになる。しかし、これは基本的に精銭基準とみなすべき系列なので、ビタ銭の登場と通用拡大がこの精銭基準米価にどのように影響したのかは注意深く考えてみる必要がある。

ビタ銭が登場したのは15世紀に入ってからであるが、その事実はビタ銭が実際の取引にすぐ使われ始めたということの意味しない。当時は「排除の対象として出てくるケースが圧倒的」だったからである。その世紀末までには、撰銭令の発布により混入比率を規定したうえで、「サン銭」として精銭と等価で混用させる試みが始まった。どの程度の実効性があったかは別としても、ビタ銭が使われた場合には等価でというのが原則であった。その状況が変わったのが16世紀である。カケ、コロ、ヒラメなどと呼ばれていた、忌避の対象である悪銭とは区別されたところのビタ銭が、ビタであっても低い価値をつけられて流通するようになり、銭の階層化が生じた。1569年に織田信長が出した撰銭令は、等価原則を捨て、その階層化された銭流通という現状を追認した点において画期的であったという(桜井2017b, 156頁; 本多2017, 103-4頁)。「現状」とは撰銭令公布に先立つ数年間を意味したとすれば、それは1560年代後半の渡来銭途絶の衝撃がいかに大きかったかを物語っている。低価値のビタ銭の使用が始まったのは、16世紀の初め、銭市場の階層化が起きて後とみてよい。

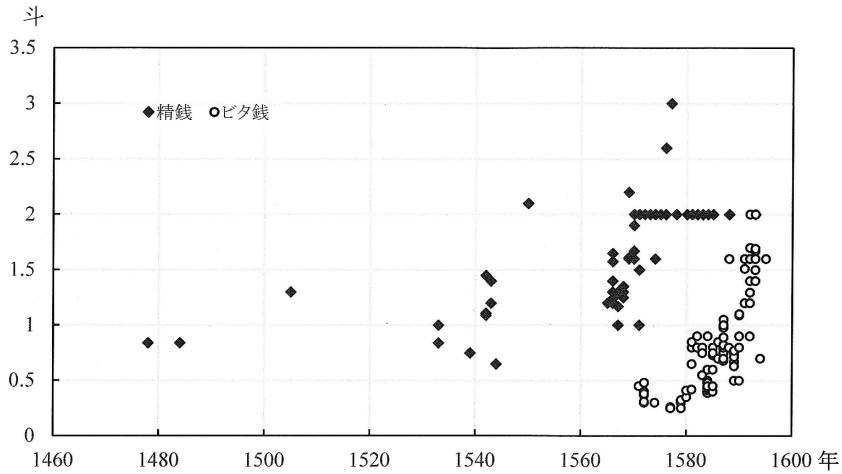
ビタ銭の通用割合、とくに京都周辺におけるその割合を示すデータは非常に少ない。信長令に半分充てのサン規定があることから類推すれば、15世紀初め以降ゆっくりとビタ銭の使用が拡大、1570年には約半分がビタと呼ばれる

低位銭となったというのが、大まかな趨勢であろうか。はっきりしているのは、奈良ではその低位銭が1590年を最後にビタとは呼ばなくなったという事実で、これは精銭が市場より姿を消したことを示唆するものと受けとられている⁶⁾。図5において、精銭の交換比率が2斗に張りついてしまったのはその現れであった(桜井2002, 53頁; 桜井2017b, 157-59頁)。それゆえ、ビタ銭通用割合について以下のように仮定する。まず、1500年まではゼロであったが年々等差級数的に拡大し、70年かかって0.5となった。それ以降は拡大のテンポを上げ、1590年に1となったという単純な想定である。この仮定にしたがって計算すれば、0.25に達したのは1536年であり、第4節でベンチマーク年に採用する1566年には0.458、もう一つのベンチマーク年1593年は仮定により1となる。

次に問題となるのは、通用していたビタ銭が精銭に対してどの程度の価値を有していたか、すなわち精銭とビタ銭の交換比率である。当時、貨幣ないしは貨幣としても利用される商品の銭との交換比率は「和市」と呼ばれたが、幸い、1478年以降については精銭建の、1571年からは奈良におけるビタ銭建の和市系列が1595年まで得られる⁷⁾。両者をグラフに描いた図5からは、精銭で買える米の量が上昇し、1570年頃からは2斗の水準に張りついてしまったこと、それと共にビタ銭の価値が急速に上昇して精銭のそれに近づいていたことが明瞭である。とくに、1590年代前半にはビタ銭の和市が数度にわたって2斗台を記録したという事実は、その基準通貨化を物語る変化といえよう。

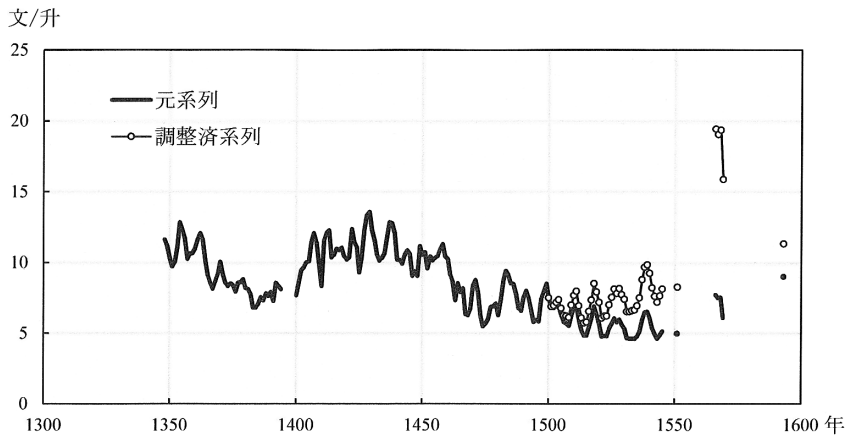
両系列が揃う1571年以降であれば、ビタ銭米価の対精銭米価比(すなわち精銭価値の対ビタ銭価値比)がどう変化したかを計算することができる。その比は、1571年には4倍強であった。1斗の米をビタ銭で購入しようとするれば4倍強の銭を用意しなければならなかったのである。その比が72-74年には5-6へと上昇、77-78年7-8とピークに達し、1582年は3から2台へと急低下して、1593年には1.26となった。渡来銭途絶の最初の影響は低価値の銭が市

図5. 米銭和市：精銭とビタ銭, 1478-1595年



註) 米銭和市とは、精銭およびビタ銭それぞれについて、銭100文で米が何斗買えるかを示す相場。
出所) 桜井(2017d), 225-30頁。

図6. 精銭基準米価とその修正系列, 1348-1593年



出所) 元データはBassino et al. (2010)による京・大和・山城・播磨系列の3か年平均(原拠は歴博データベース)。高島・深尾・西谷(2017), 12頁の図0-3における3か年平均系列に同じ。1550年以降の修正系列は本文をみよ。

場に出回ることであったが、精銭が払底するとビタ銭の価値が上昇を始め、瞬間に1に近づいたのである。1570年以前の奈良についてはわからないが、幸い田中(2007)による京都に焦点を絞った論稿が15世紀末まで遡った考察をしている。首都京都は例外的に精銭ストックが潤沢であったところなので精銭が相対的に安目であったけれども、その対ビタ銭比の動きは参考になる。すなわち、15世紀末から16世紀前期は2倍、永禄年間(1560年代後半)3倍、元亀年間(1570年代初)には4倍となり、以降急速に低下してほぼ同価値となったという(田中

2007, 112-13頁)。この動きが京都以外の畿内でもみられたとすれば、1570年代前半における奈良・京都比率を求め、その比率から奈良系列を1560年以前に遡って推計可能である。このようにして求めたビタ銭割合と精・ビタ銭価値比とから、1500-1593年の大和・山城・播磨米価系列を銭市場の乱高下を反映させた系列に変換することができる。その詳細は付表とその註をみていただきたいが、精銭が姿を消したといわれる1590年以降でも精銭とビタ銭の交換比率は完全に1となったわけではなかった事実には注意を向けたい。ビタ銭が基準貨幣となっ

たからといって、ただちにインフレが終息したわけではなかったのである。

大和・山城・播磨米価の元系列と調整済系列をグラフに描けば、図6のとおりである。元系列では16世紀の最初の50年間もデフレが続いていたことになるのに対して、白抜きマークで示した調節済の系列は1550年以降米価上昇が始まったことを、そして1560年代半ばからは激しいインフレとなったことを示している。ただ、そのインフレは非常に短期間の現象であった。図6からは、1560年末以降、ビタ銭の価値上昇とともにインフレが終息に向かったこともみてとることができる。

3. 米賃金

中世において算出可能な実質賃金は米換算の賃金である。したがって、項2.1でみた賃金系列を項2.2の米価系列で除すればよいのであるが、賃金系列には若干の注釈が要る。

本稿では熟練・非熟練別に系列が用意されており、そこから総合系列を算出する。それゆえ熟練・非熟練別のウェイトが必要であるが、その直接的な手がかりはない。間接的な情報であれば、邸宅・社寺の工事記録がある。大きな工事では、技術上あるいは管理上の区別を示す様々な名称の職人と労働者が雇用された。親方あるいは惣大工、「引頭」や脇工、「長」や小工、「連」、童あるいは小者衆などである。11-15世紀における4工事の具体例から(遠藤1956, 30-31, 187-88頁)、これらを大きく熟練(親方から「長」まで)と非熟練(「連」相当および童)の二つに区分し、その雇用比率を計算すると0.35:0.65となるので、この比を全期間通して適用する。

そのうえで、米払と銭払のウェイトがどう変化したのかを考える。熟練・非熟練工ともに物品貨幣時代の産物である米払が存在したことは明らかであるが、非熟練工の場合、歴博データベースからは標準の賃金率とみなす10文に対応する米払の存在を確認できなかった。一方、熟練については、15世紀中に銭払手間賃の底上げがあったが、1570年代からは、銭相場に

おける上記の混乱をうけて米払が拡大、銭払と米払の地位が逆転をしたようである。具体的な数値を示唆する文献証拠は乏しいけれども、全雇用契約にしろ米払のシェアは1565年まで0.1であったと仮定し、1570年までの5年間にそれが0.25へと上昇、したがって熟練銭払のシェアは0.25から0.1へと低下し、以降その水準に留まったと想定することにした(付表の註をも参照)。

このようにして、1348年から1593年までデータのあるすべての年次について、熟練・非熟練別実質賃金系列と、総合実質賃金系列を求めることができる。ただし、これらは手間賃系列なので、賄を上乗せする。中世の建築工事において労働者は工事現場に起居するのが一般的で、したがって食事も提供されていた。賃金が銭払であっても賄は米の量で表現されるのが一般的で、しかも様々な水準がありえたようである(遠藤1985, 第9, 11章)。しいて平均をとれば、熟練で1日1升、非熟練で3合というのがおよその水準だったようなので、この値をすべての米換算手間賃に加算する。

こうして得られた熟練・非熟練別推計値から加重平均によって総合系列を算出、それを熟練・非熟練格差倍率とともに図7に掲げる。

4. 実質賃金水準と熟練・非熟練間格差

図7が示す総合系列は、15世紀中に賃金成長があったことを示す。高島推計による非熟練系列(図1)もこの点では類似の傾向を示していた。しかし、それが1550年頃までのより長期にわたる、しかもかなり大幅な賃金上昇であったとは異なり、この総合系列からわかるのは、それが一本調子とはいいがたい増加で、しかも1500年以前の1470年代にピークアウトしていたことである。その後の局面についても違いがある。図1は50年ほどの下降局面で終わっているのに対して、図7によれば、1474年の山に続いたのは90年に及ぶ長い下降局面と16世紀末の短い上昇局面であった。この1474年からの100年余が90年以上に及ぶ低下局面とそこからの回復局面とからなっていたというのは、

図7. 米賃金総合系列と熟練・非熟練格差倍率, 1348-1593年

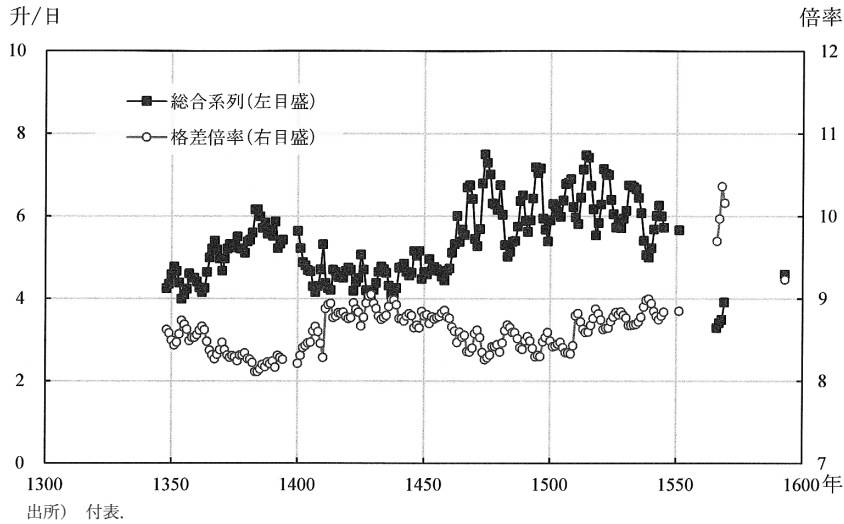


表1. 米賃金指数：新旧比較, 1348-1593年

(1348年を100とする指数)

年	米価 (3か年平均)	米賃金			
		高島推計 非熟練	新推計		
			総合	熟練	非熟練
1348	100	100	100	100	100
1384	59	210	145	144	153
1429	117	96	93	94	89
1474	47	234	176	175	183
1566	167	167	78	79	70
1593	97	151	108	109	102

出所) 高島・深尾・西谷(2017), 9頁, 高島(2017), 図2.1, 96頁, および付表.

表2. 米賃金期間別変化率：新旧比較, 1348-1593年

(年率, %)

期間(長さ)	米価 (3か年平均)	高島推計 非熟練	新推計		
			総合	熟練	非熟練
1348-1384(36年)	-1.5	2.1	1.0	1.0	1.2
1384-1429(45年)	1.5	-1.7	-1.0	-0.9	-1.2
1429-1474(45年)	-2.0	2.0	1.4	1.4	1.6
1474-1566(92年)	1.4	-0.4	-0.9	-0.9	-1.0
1566-1593(28年)	-2.0	-0.4	1.2	1.2	1.4

出所) 表1.

高島推計になかった新しい知見である。16世紀に入って生じた、ビタ銭使用拡大の米価水準に与えた乱高下的な影響と米遣の拡大とを明示的に取り込んだ本推計の特徴が反映したものといえる。

ここではいくつかのベンチマーク年を選択し、それぞれの系列から得られる水準とベンチマ

ク年間の変化率とを比較検討することにした(表1, 表2)。ベンチマークは総合賃金系列をみて決定したもので、1348年, 1384年, 1429年, 1474年, 1566年, 1593年である。このうち1384年と1474年は循環変動の山の、1429年と1566年は谷の年である(米価欄では山と谷が逆になる)。両端の年次については確定が難

しいが、1348年はおそらく谷の年、1593年は山へ向かう途中の年と思われる。

表2の非熟練賃金からやや詳しくみよう。1348年からの36年間の上昇率と1384年からの45年間の下落率は絶対値で同じ1.2%であり、その後の45年間に1.6%の上昇率の時代が来たため、1348年を100とする1474年の指数が183と、かなりの賃金成長となった。ただし、高島推計の同年次の指数234と比べればだいぶ低位である。熟練賃金に目を転ずれば、それは175にすぎず、結果として総合指数では176止まりであった。1474年からの92年間、非熟練の場合、再びマイナス1%の下降期が訪れ、1566年からの28年間は1.4%という高い回復を示したのである。熟練工では、マイナス0.9%と1.2%と少し緩やかな変化であった。結果として、1348年を100とする1593年の指数は非熟練労働者の場合が102、熟練工で109、総合指数で108であった。2世紀半の間、非熟練労働者には実質賃金収入の増加がほとんどなく、熟練工の場合に9%の上昇があったに過ぎなかったのである。最後の四半期は上昇にあったので、織豊政権期という時代状況を考えると、1600年にはもう少し高い水準まで戻していたのではないか。ただ、それでも高島推計の1593年151と比べると相当に低い水準であったと推測される。

本推計の新しさは、熟練賃金の系列が含まれており、したがってこの熟練・非熟練間の動きの違いを検討できる点にある。図7と表1-2をみれば、格差倍率はおおむね実質賃金と逆サイクルで変動していた。実質賃金が増加基調にあるときは非熟練の上昇率が高く、逆に下降基調のときは非熟練の下落率が大きかったのである。このパターンは、近現代の労働経済を対象とした場合にしばしば観察されるものである。しかし、そこで前提となっているのは人口増加率が低く、労働供給が制約的となった状況であり、中世後期の日本には当てはまらない。すでにみたように、15世紀における貨幣賃金の底上げは熟練労働者に起きたのであって、非熟練労働者にはなかった。この現象が起きた期間を含

む150年間には年平均増加率0.35%前後の人口成長があったというのが私たちの想定だからである(斎藤・高島2017, 63頁; 斎藤2018)⁸⁾。

この熟練・非熟練間格差の変動パターンには、米遣という中世独特の慣行がかかっている。米を貨幣として使用することは古くから存在した慣行であり、本稿の推計においても1565年までは、労働契約の1割、熟練労働だけにかぎれば3割弱は常に米払であったと仮定をした⁹⁾。米払であれば米換算の実質賃金は変化をしない。銭払の実質賃金が増加期であっても不変化である。それが15世紀における貨幣賃金の底上げ効果を相殺し、同世紀の後半50年にはそれをわずかに上回るようになった。それが16世紀のインフレと実質賃金低下の局面に入ると、米払のインフレ耐性的性格が効いて格差倍率が上昇に転じた。貨幣市場の混乱をみた熟練職人の多くが米払を選択したことも、その格差拡大に寄与した。しかし、インフレは直ちにビタ銭の価値引上げを促し、1570年以降インフレに歯止めがかかると、米価は値下りへと転じ、非熟練実質賃金指数の水準も1348年を100としたとき100を少し超えるところまで戻し、格差拡大の趨勢に歯止めがかかったというのが実情であった。それゆえ、この所見が可能となったのも、ビタ銭使用拡大がもたらした米払賃金の拡大を明示的に推計へ取り込んだことの結果だったのである。

5. 結語

本稿は、熟練および非熟練労働者の銭払賃金に加え、米払賃金をも検討の対象として熟練・非熟練別実質賃金の計測を試み、そのうえで貨幣市場の変動、とくに16世紀に入ってからの銭市場の階層化と1560年代後半における渡来銭途絶とが、どのようなインパクトを熟練・非熟練別の実質賃金推計とその変化率に及ぼしたかをみた。ただ、残念ながら推計としての精度が高いとはいえない。ビタ銭の流通割合や米払のシェアにかんする想定がデータ不足のため粗く、貨幣価値のビタ・精銭比は、1571年以降については現実の相場資料があるけれども、そ

れ以前の水準については強い仮定をおかざるをえなかったからである。本稿で試みたのはそれら大胆な仮定の下でなされた、しかも建築業モデルによる試算の域を出ないといわれても、その批判は甘受せざるをえない。しかし、そのような限定付ではあるけれども、銭市場の急激な変容が、労働市場において何をどの方向に変化させたかは明瞭かつ直截に示すことができたと思っている。

その観察結果のなかで際立つのは、第一に、実質賃金上昇の近接要因が米価の低落であり、その米価低落は銭貨供給量に強く規定されていたという事実である。それと関連して、第二に、物品貨幣時代から存在した米払賃金が、貨幣供給を渡来銭に依存するという銭市場に内在する不安定さへの切札として熟練労働の取引において採用された。これは、16世紀の60年代後半からとくに目立った現象であった。そして第三に、熟練職人は15世紀中に貨幣賃金の底上げをも享受していた。これら三点が、中世労働市場にみられた特筆すべき事象であった。

そうであるとする、解釈上の問題が生ずる。それは、内国交易が活性化し、スミスの成長の萌芽が見られた時代という(綿貫 2017; Saito 2020)、中世後期経済のもう一つの側面とどう関係するのであろうか。社会的分業の進展、市場取引の成長は貨幣経済の拡大によって支えられるのが一般的である。しかし、貨幣供給そのものに弾力性がないとすると、それが成長の制約とはならなかったのであろうか。この問題を解明することは本稿の範囲をこえるが、日本の中世において早熟的に登場した、割符・預状・替状とか替米・替銭という手形類を利用した現金節約的取引の役割について考える必要があるのかもしれない(桜井 1997, 2002)。市場経済が拡大するなかで、それらが貨幣供給制約を回避する一手段となったかもしれないからである。

労働経済に限っても残された課題は少なくない。その一つは、本稿が資料の関係で畿内を中心とした考察に終始した点にある。たとえば、格差の問題は地域間にかんしても論じられるべきだったのではないであろうか。たしかに、賃

金の地域差については利用可能な資料がほとんどない。しかし、すでに触れたように、米払という現象は畿内と西日本にはみられた一方で、東国では室町時代に渡来した明銭である永楽銭が大量に流通、戦国期に基準通貨化したといわれる(鈴木 1999, 第3部第2章)。知行宛行を貫高基準で行うことの多かった東国の戦国大名領国において永楽銭が潤沢であったとすれば、米払賃金が登場する機会は少なかったと考えてよいのであろうか。もっとも低位銭の流通にかんしては、西国でも早くからみられた。階層化現象は「南北の辺境地域から波及した」とみる見解もある(桜井 2017b, 155頁)¹⁰⁾。これらを考え合わせると、東国も西国も、米価と貨幣賃金の関係は畿内におけるそれと大きく異なっていた可能性がある。実質賃金の水準だけではなく、変動のパターンも畿内と東国、さらには西日本など列島の諸地域で、それぞれに異なっていたのかもしれないのである。

もう一つは、16世紀の最後の数十年間がデータの面で手薄なことである。中近世移行期とは、自律的な地域貨幣流通の世界に国家が「乗り込んでくる」時代、すなわち金銀銭貨の国家鑄造が始まり、知行宛行と貢租体系には石高原理が併用されたところの、新時代への移行期であった(川戸 2008, 19頁; 黒田 2014, 140頁; 本多 2017, 103-16頁)。加えて、国内では新田と鉱山の開発が進み、南蛮貿易が活発となった時代でもあった。これらの新たな動きが労働経済に与えた影響はどのようなものだったのか。その検討のためには、歴博データベースでは十分にカバーされていない織豊政権期、さらには徳川初期の資料発掘が望まれるところである。

(一橋大学経済研究所、
関西学院大学経済学部・経済学研究所)

注

* 一橋大学経済研究所定例研究会での報告に対し、コメントと改稿のためのヒントをくださった予定討論者の岩橋勝氏とフロアの方々に感謝する。

1) もっとも、GDP推計チームは非熟練賃金の推移さえわかれば十分とまでいっているわけではない。高島・深尾・西谷(2017)では熟練職人の大工が取上げ

られ、貨幣賃金とともにその米換算系列が図示されている(図0-3, 12頁)。

2) ビタ銭の登場から織豊政権期をへて徳川初期にいたる期間の貨幣問題については、1990年代末より大きな研究上の進展があった。以下を参照(展望論文を含む)。大田(1995)、鈴木(1999)、浦長瀬(2001)、桜井(2002)、本多(2006, 2017)、田中(2007)、川戸(2008)、高木(2010)、千枝(2011, 2014)、黒田(2014)、小早川(2016)、安国(2016)、桜井(2017b, 2017c, 2017d)。

3) 増手間と同様、支払額に含まれたり含まれなかったりした費目に資材費もしくは持込分があった(大河1971, 171-77頁)。もっとも、これらは材料費であって賃金を構成する費目ではない。

4) デフレータとして使われた米価系列は、深尾ほか(2017)、付表2を参照。ただし、載せられているのは20年平均値である。物価にかんする先行研究は多くない。百瀬(1957)および神木(1980)を参照。

5) 番匠貨幣賃金の底上げが起きたのは15世紀末から1520年代であったという、京都の臨川寺と大徳寺の資料に依拠した指摘があるが(田中2007, 110-112頁)、カバリッジの広い歴博データベースからみれば、上昇はそれ以前から始まっていたとみるべきである。

6) 精銭が姿を消したということは、ただちにビタ銭による一元化となったことを意味しないかもしれない。京都では、精銭の何倍もの超高価値銭が登場したという記録がある(田中2007, 113頁)。

7) 桜井(2017c)の解説によれば、「和市」は相場の意ではあるが、すべての商品に使われた用語法ではなく、「主要な年貢品目や貨幣機能の強い商品に用いられる」ことの多かった、「たんなる価格というよりは交換相場というニュアンスをより強く含んだ概念」であったという(184頁)。

8) もっとも、この対比を近代と前近代の対照と即断するのは危険である。明治以前、18世紀初から19世紀初の畿内において、非熟練の農業日雇賃金上昇率が熟練大工賃金のそれを上回り、したがって熟練・非熟練間格差が縮小するという現象が生じていた(斎藤1998, 25-30頁)。この徳川後半期100年は、中世後期とは異なり人口停滞の時代であった。

9) この仮定は、将来改訂をしたいと思っている。たとえば、15世紀中に標準的な貨幣賃金が100文から110文へ上昇したとき、米払のシェアは縮小したとしてもおかしくない。ただ、現段階ではそのエヴィデンスが得られないために、本意ながらシェア0.1を最初の2世紀間不変としたのである。

10) 桜井のあげる「南」の事例は豊前である(本多2006, 32-33頁)が、最近では四国でも低位銭の流通があったことが報告されている(小早川2016)。地域経済との関連については、川戸(2008)、243頁以下、および千枝(2014)を参照。

引用文献

千枝大志(2011)『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』岩田書院。
千枝大志(2014)「中世後期の貨幣と流通」、大津透ほ

か編『岩波講座日本歴史』第8巻、中世3、岩波書店、pp.189-223。

遠藤元男(1956)『職人の歴史—その生活と技術』至文堂。

遠藤元男(1985)『古代中世の職人と社会』雄山閣。
深尾京司・斎藤修・高島正憲・貴田潔(2017)「生産・物価・所得の推定」、深尾・中村・中林編(2017)、pp.289-294。

深尾京司・中村尚史・中林真幸編(2017)『岩波講座日本経済の歴史』第1巻：中世、岩波書店。

林まゆみ(1995)「中世民衆社会における被差別民と造園職能の発展過程」『ランドスケープ研究』第58巻5号、pp.17-20。

本多博之(2006)『戦国織豊期の貨幣と石高制』吉川弘文館。

本多博之(2017)「中世貨幣一渡来銭の時代」、深尾・中村・中林編(2017)、pp.92-116。

神木哲男(1980)「中世後期における物価変動」、同『日本中世商品流通史論』有斐閣、pp.218-237。

川戸貴史(2008)『戦国期の貨幣と経済』吉川弘文館。
小早川裕吾(2016)「中世四国地方の通貨事情の実態」『経済史研究』20号、pp.213-237。

黒田明伸(2014)『貨幣システムの世界史—(非対称性)をよむ』岩波書店。

百瀬今朝雄(1957)「室町時代における米価表—東寺関係の場合」『史学雑誌』第66編1号、pp.58-70。

毛利一憲(1974)「ビタ銭の価値変動に関する研究—『多聞院日記』により天正年間を中心として(上下)』『日本歴史』第310号、pp.55-66、第311号、pp.67-77。

大河直躬(1971)『番匠—ものと人間の文化史』法政大学出版局。

大田由紀夫(1995)「12-15世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布—日本・中国を中心として」『社会経済史学』第61巻5号、pp.156-184。

斎藤修(1998)『賃金と労働と生活水準—日本経済史における18-20世紀』岩波書店。

斎藤修(2018)「1600年の全国人口—17世紀人口経済史再構築の試み」『社会経済史学』第84巻1号、pp.3-23。

斎藤修・高島正憲(2017)「人口と都市化と就業構造」、深尾・中村・中林編(2017)、pp.57-89。

桜井英治(1996)『日本中世の経済構造』岩波書店。

桜井英治(1997)「日本中世における貨幣と信用について」『歴史学研究』第703号、pp.68-78。

桜井英治(2002)「中世の貨幣・信用」、中西聡・桜井英治編『流通経済史』山川出版社、pp.42-77。

桜井英治(2017a)『交換・権力・文化—ひとつの日本中世社会論』みすず書房。

桜井英治(2017b)「錢貨のダイナミズム—中世から近世へ」、桜井(2017a)、pp.145-178。

桜井英治(2017c)「中世における物価の特性と消費者行動」、桜井(2017a)、pp.179-220。

桜井英治(2017d)「精銭終末期の経済生活」、桜井(2017a)、pp.220-259。

鈴木公雄(1999)『出土銭貨の研究』東京大学出版会。

高木久史(2010)『日本中世貨幣史論』校倉書房。

高島正憲(2017)『経済成長の日本史—古代から近世の超長期 GDP 推計 730-1974』名古屋大学出版会。
 高島正憲・深尾京司・西谷正浩(2017)「成長とマクロ経済」, 深尾・中村・中林編(2017), pp. 2-23。
 田中浩司(2007)「貨幣流通からみた16世紀の京都」, 鈴木公雄編『貨幣の地域史—中世から近世へ』岩波書店, pp. 81-124。
 田辺泰・渡辺保忠(1949)「建築工匠の賃銀について」『日本建築学会研究報告』第1号, pp. 2~87-90。
 浦長瀬隆(2001)『中近世日本貨幣史—取引手段の変化と要因』勁草書房。
 脇田晴子(2002)『日本中世被差別民の研究』岩波書店。
 綿貫友子(2017)「中世の交易」, 深尾・中村・中林編(2017), pp. 259-287。

安国良一(2016)『日本近世貨幣史の研究』思文閣出版。
 Bassino, J.-P., K. Fukao and M. Takashima (2010) "Grain Wages of Carpenters and Skill Premium in Kyoto, c. 1240-1600," paper presented at Economic History Society Conference, Durham, England.
 Bassino, J.-P., S. Broadberry, K. Fukao, B. Gupta and M. Takashima (2019) "Japan and the Great Divergence, 730-1874," *Explorations in Economic History*, Vol. 72, Issue 1, pp. 1-22.
 Saito, O. (2020 forthcoming), "Market Growth and the Proliferation of Occupations and Commodities in Medieval Japan," *Social Science Japan Journal*, Vol. 23, Issue 2.

付表. 熟練・非熟練別米賃金の推計結果, 1348-1593年

年	米賃金(含賄, 升/日)					格差倍率
	総合	熟練			非熟練	熟練/非熟練 (4)/(5)
		米払	銭払	平均		
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1348	4.2	11.0	9.6	10.0	1.2	8.6
1349	4.4	11.0	9.9	10.2	1.2	8.6
1350	4.6	11.0	10.7	10.8	1.3	8.5
1351	4.8	11.0	11.3	11.2	1.3	8.4
1352	4.7	11.0	10.9	10.9	1.3	8.5
1353	4.4	11.0	10.0	10.3	1.2	8.6
1354	4.0	11.0	8.8	9.4	1.1	8.7
1355	4.1	11.0	9.1	9.6	1.1	8.7
1356	4.2	11.0	9.6	10.0	1.2	8.6
1357	4.6	11.0	10.7	10.8	1.3	8.5
1358	4.5	11.0	10.4	10.6	1.2	8.5
1359	4.5	11.0	10.4	10.6	1.2	8.5
1360	4.4	11.0	10.1	10.4	1.2	8.6
1361	4.3	11.0	9.6	10.0	1.2	8.6
1362	4.2	11.0	9.3	9.8	1.1	8.7
1363	4.3	11.0	9.6	10.0	1.2	8.6
1364	4.6	11.0	10.8	10.9	1.3	8.5
1365	5.0	11.0	11.9	11.7	1.4	8.4
1366	5.2	11.0	12.6	12.2	1.5	8.3
1367	5.4	11.0	13.3	12.6	1.5	8.3
1368	5.2	11.0	12.6	12.1	1.5	8.3
1369	5.0	11.0	11.9	11.6	1.4	8.4
1370	4.7	11.0	10.9	11.0	1.3	8.5
1371	5.0	11.0	11.9	11.6	1.4	8.4
1372	5.2	11.0	12.6	12.2	1.5	8.3
1373	5.3	11.0	13.0	12.4	1.5	8.3
1374	5.2	11.0	12.7	12.2	1.5	8.3
1375	5.3	11.0	12.9	12.4	1.5	8.3
1376	5.5	11.0	13.6	12.8	1.6	8.2
1377	5.2	11.0	12.7	12.2	1.5	8.3
1378	5.2	11.0	12.6	12.2	1.5	8.3
1379	5.1	11.0	12.3	11.9	1.4	8.3
1380	5.4	11.0	13.2	12.6	1.5	8.3
1381	5.4	11.0	13.3	12.7	1.5	8.3
1382	5.6	11.0	13.9	13.1	1.6	8.2
1383	6.2	11.0	15.7	14.3	1.8	8.1
1384	6.2	11.0	15.7	14.3	1.8	8.1
1385	6.0	11.0	15.1	13.9	1.7	8.1
1386	5.7	11.0	14.2	13.3	1.6	8.2
1387	5.8	11.0	14.6	13.6	1.7	8.2
1388	5.6	11.0	13.8	13.0	1.6	8.2
1389	5.7	11.0	14.1	13.2	1.6	8.2
1390	5.5	11.0	13.6	12.9	1.6	8.2
1391	5.9	11.0	14.7	13.7	1.7	8.2
1392	5.2	11.0	12.7	12.2	1.5	8.3

年	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1393	5.3	11.0	13.0	12.4	1.5	8.3
1394	5.4	11.0	13.3	12.7	1.5	8.3
1400	5.6	11.0	14.0	13.1	1.6	8.2
1401	5.2	11.0	12.7	12.2	1.5	8.3
1402	4.9	11.0	11.6	11.4	1.4	8.4
1403	4.8	11.0	11.3	11.2	1.3	8.4
1404	4.7	11.0	11.0	11.0	1.3	8.5
1405	4.7	11.0	10.9	10.9	1.3	8.5
1406	4.3	11.0	9.7	10.1	1.2	8.6
1407	4.2	11.0	9.3	9.8	1.1	8.7
1408	4.3	11.0	9.8	10.1	1.2	8.6
1409	4.7	11.0	11.0	11.0	1.3	8.5
1410	5.3	11.0	13.0	12.4	1.5	8.3
1411	4.4	11.0	10.1	10.3	1.2	8.9
1412	4.2	11.0	9.7	10.0	1.1	8.9
1413	4.2	11.0	9.5	10.0	1.1	8.9
1414	4.7	11.0	11.1	11.1	1.3	8.8
1415	4.6	11.0	10.9	11.0	1.2	8.8
1416	4.5	11.0	10.6	10.7	1.2	8.8
1417	4.6	11.0	10.6	10.7	1.2	8.8
1418	4.5	11.0	10.5	10.6	1.2	8.8
1419	4.7	11.0	11.0	11.0	1.3	8.8
1420	4.8	11.0	11.3	11.2	1.3	8.8
1421	4.7	11.0	11.1	11.1	1.3	8.8
1422	4.2	11.0	9.5	9.9	1.1	9.0
1423	4.4	11.0	10.2	10.4	1.2	8.9
1424	4.5	11.0	10.5	10.6	1.2	8.8
1425	5.1	11.0	12.3	11.9	1.4	8.7
1426	4.7	11.0	11.1	11.1	1.3	8.8
1427	4.2	11.0	9.5	9.9	1.1	8.9
1428	4.0	11.0	8.9	9.5	1.0	9.0
1429	4.0	11.0	8.7	9.4	1.0	9.1
1430	4.2	11.0	9.5	10.0	1.1	8.9
1431	4.4	11.0	10.1	10.3	1.2	8.9
1432	4.6	11.0	10.9	11.0	1.2	8.8
1433	4.8	11.0	11.4	11.3	1.3	8.7
1434	4.7	11.0	11.2	11.1	1.3	8.8
1435	4.6	11.0	10.9	10.9	1.2	8.8
1436	4.3	11.0	9.9	10.2	1.1	8.9
1437	4.1	11.0	9.2	9.7	1.1	9.0
1438	4.1	11.0	9.2	9.7	1.1	9.0
1439	4.3	11.0	9.7	10.1	1.1	8.9
1440	4.8	11.0	11.3	11.2	1.3	8.8
1441	4.8	11.0	11.3	11.2	1.3	8.8
1442	4.8	11.0	11.6	11.4	1.3	8.7
1443	4.6	11.0	10.9	11.0	1.2	8.8
1444	4.6	11.0	10.7	10.8	1.2	8.8
1445	4.6	11.0	10.9	10.9	1.2	8.8

年	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1446	5.2	11.0	12.6	12.1	1.4	8.6
1447	5.0	11.0	12.2	11.8	1.4	8.7
1448	5.2	11.0	12.6	12.1	1.4	8.6
1449	4.5	11.0	10.4	10.6	1.2	8.8
1450	4.6	11.0	10.9	11.0	1.2	8.8
1451	4.6	11.0	10.8	10.8	1.2	8.8
1452	5.0	11.0	11.9	11.7	1.3	8.7
1453	4.7	11.0	11.1	11.0	1.3	8.8
1454	4.8	11.0	11.3	11.2	1.3	8.8
1455	4.7	11.0	11.1	11.1	1.3	8.8
1456	4.7	11.0	11.0	11.0	1.3	8.8
1457	4.5	11.0	10.6	10.7	1.2	8.8
1458	4.4	11.0	10.3	10.5	1.2	8.9
1459	4.7	11.0	11.1	11.0	1.3	8.8
1460	4.7	11.0	11.2	11.2	1.3	8.8
1461	5.1	11.0	12.5	12.0	1.4	8.6
1462	5.3	11.0	13.1	12.5	1.5	8.6
1463	6.0	11.0	15.3	14.0	1.7	8.4
1464	5.4	11.0	13.3	12.6	1.5	8.6
1465	5.6	11.0	14.2	13.2	1.6	8.5
1466	5.5	11.0	13.8	12.9	1.5	8.5
1467	6.6	11.0	17.5	15.5	1.9	8.3
1468	6.7	11.0	17.7	15.6	1.9	8.2
1469	6.4	11.0	16.6	14.8	1.8	8.3
1470	5.4	11.0	13.5	12.7	1.5	8.5
1471	5.3	11.0	13.0	12.3	1.4	8.6
1472	5.6	11.0	14.3	13.2	1.6	8.4
1473	6.7	11.0	17.8	15.6	1.9	8.2
1474	7.4	11.0	20.1	17.1	2.1	8.1
1475	7.2	11.0	19.4	16.6	2.1	8.1
1476	6.9	11.0	18.5	16.0	2.0	8.1
1477	6.2	11.0	16.3	14.5	1.8	8.3
1478	6.2	11.0	16.2	14.4	1.7	8.3
1479	6.1	11.0	15.8	14.2	1.7	8.3
1480	6.6	11.0	17.7	15.4	1.9	8.2
1481	5.9	11.0	15.4	13.9	1.7	8.3
1482	5.3	11.0	13.0	12.3	1.4	8.5
1483	5.0	11.0	12.1	11.7	1.4	8.6
1484	5.1	11.0	12.5	12.0	1.4	8.6
1485	5.3	11.0	13.3	12.5	1.5	8.5
1486	5.3	11.0	13.4	12.5	1.5	8.5
1487	5.7	11.0	14.5	13.2	1.6	8.4
1488	6.2	11.0	16.5	14.5	1.8	8.2
1489	6.4	11.0	16.9	14.8	1.8	8.1
1490	5.8	11.0	14.9	13.5	1.6	8.3
1491	5.5	11.0	14.1	13.0	1.5	8.4
1492	5.8	11.0	14.9	13.5	1.6	8.3
1493	6.3	11.0	16.7	14.6	1.8	8.1
1494	7.0	11.0	19.1	16.1	2.0	8.0
1495	6.8	11.0	18.6	15.8	2.0	8.0
1496	6.9	11.0	19.0	16.0	2.0	8.0
1497	5.8	11.0	15.1	13.6	1.6	8.3
1498	5.6	11.0	14.3	13.0	1.6	8.3
1499	5.3	11.0	13.3	12.4	1.5	8.4
1500	5.8	11.0	15.0	13.5	1.6	8.3
1501	6.3	11.0	16.2	14.7	1.8	8.4
1502	6.2	11.0	16.1	14.6	1.7	8.4
1503	6.1	11.0	15.6	14.3	1.7	8.4
1504	6.0	11.0	15.2	14.0	1.7	8.5
1505	6.4	11.0	16.5	14.9	1.8	8.4
1506	6.8	11.0	17.8	15.8	1.9	8.3
1507	6.8	11.0	17.9	15.9	1.9	8.3
1508	6.9	11.0	18.2	16.1	1.9	8.3
1509	6.2	11.0	16.0	14.6	1.7	8.4
1510	6.0	11.0	15.3	14.1	1.6	8.8
1511	5.8	11.0	14.8	13.7	1.6	8.8
1512	6.5	11.0	16.9	15.2	1.7	8.7
1513	7.1	11.0	19.1	16.8	1.9	8.6
1514	7.5	11.0	20.2	17.6	2.0	8.6
1515	7.4	11.0	20.0	17.4	2.0	8.6

年	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1516	6.7	11.0	17.8	15.9	1.8	8.7
1517	6.2	11.0	16.0	14.5	1.7	8.8
1518	5.5	11.0	13.9	13.1	1.5	8.9
1519	5.8	11.0	14.9	13.8	1.6	8.8
1520	6.3	11.0	16.3	14.8	1.7	8.7
1521	7.1	11.0	19.1	16.8	1.9	8.6
1522	7.0	11.0	18.8	16.5	1.9	8.6
1523	7.0	11.0	18.7	16.5	1.9	8.6
1524	6.4	11.0	16.7	15.1	1.7	8.7
1525	6.1	11.0	15.6	14.3	1.6	8.8
1526	5.7	11.0	14.5	13.5	1.5	8.8
1527	5.9	11.0	15.1	13.9	1.6	8.8
1528	5.7	11.0	14.5	13.5	1.5	8.8
1529	5.9	11.0	15.2	14.0	1.6	8.8
1530	6.1	11.0	15.9	14.5	1.7	8.8
1531	6.8	11.0	17.8	15.9	1.8	8.7
1532	6.8	11.0	17.8	15.9	1.8	8.7
1533	6.7	11.0	17.7	15.8	1.8	8.7
1534	6.7	11.0	17.5	15.7	1.8	8.7
1535	6.4	11.0	16.9	15.2	1.7	8.7
1536	6.1	11.0	15.7	14.3	1.6	8.8
1537	5.4	11.0	13.5	12.8	1.4	8.9
1538	5.1	11.0	12.4	12.0	1.3	9.0
1539	5.0	11.0	12.2	11.8	1.3	9.0
1540	5.2	11.0	12.9	12.4	1.4	8.9
1541	5.7	11.0	14.4	13.4	1.5	8.8
1542	6.0	11.0	15.5	14.2	1.6	8.8
1543	6.3	11.0	16.3	14.8	1.7	8.7
1544	6.0	11.0	15.4	14.1	1.6	8.8
1545	5.7	11.0	14.5	13.5	1.5	8.8
1551	5.7	11.0	14.3	13.4	1.5	8.8
1566	3.3	11.0	6.7	7.9	0.8	9.7
1567	3.4	11.0	6.8	8.2	0.8	10.0
1568	3.5	11.0	6.7	8.5	0.8	10.4
1569	3.9	11.0	7.9	9.5	0.9	10.2
1593	4.6	11.0	10.7	10.9	1.2	9.2

註) 推計方法の概要

- 賃金(手間賃): 図2-4より, (i)熟練工の米払は1348年から1593年までの全期間10升, 銭払は1410年以前100文, 1411-1509年105文, 1510年以降110文, (ii)非熟練工(銭払のみ)は全期間10文とする。
- 賄: 全期間, (i)熟練工は米払・銭払とも, 1升, (ii)非熟練工, 3合とし, それを米換算手間賃に上乘せする。
- 熟練米払, 熟練銭払, 非熟練銭払のウェイト: 米遣が1560年代後半から一挙に増加したという観察, および米払賃金は非熟練では定着しなかったらしいという推測を重視して, 下記のとおりとする。

期間	熟練米払 (W_{rs})	熟練銭払 (W_{ms})	非熟練銭払 (W_{us})
1348-1565年	0.1	0.25	0.65
1565-1570年	0.1→0.25	0.25→0.1	0.65
1570-1593年	0.25	0.1	0.65

なお, 1565-1570年における変化は等比級数的であったとする。

- 米価: (i)1500年までは, 図6の京・大和・山城・播磨3か年平均米価系列をそのまま使う, (ii)1501年以降は, 資料上の米価を p^p , 調整済米価を p^* とし, 精銭使用割合を SR , ビタ銭使用割合を $(1-R)$, ビタ銭米価の対精銭米価比を r とすれば, $p^* = p^p \times SR + r \times (1-SR) \times p^p$ となるので, $SR, (1-SR), r$ を下記のとおり想定し, 調整済米価を算出する。

期間	r	SR	(1-SR)
1500-1560年	2.87		
1560-1570年	4.30	1→0.5	0→0.5
1570-1590年	5.74	0.5→0	0.5→1
1593年	1.26	0	1

(a) SRおよび(1-SR)の1500-1570年と1570-1590年における変化は、等差級数的に進行したと仮定する。しかし、1570年前後の数年間は上昇率の移行が徐々に起こったと想定されるので、1566と1574年の間における各年の比率は9年移動平均を適用して求めた。

(b) r にかんして、1570-1590年期間の5.74と1593年の1.26は、それぞれ多聞院日記に依拠した奈良系列(桜井2017d, 225-30頁)から直接計算された値とする。前者は1571-1574年10事例の、後者は当該年9事例の算術平均

である。それ以前の2つの r 値は京都系列(田中2007, 112-13頁)を利用した奈良系列である。まず、奈良系列の5.74と京都系列の1571-1573年相場との比を求め、その比を京都系列の1565-1570年値と15世紀末-16世紀前期の値に乗じて推計したものである(したがって1566-1569年は前者の、1551年は後者の推計値をもって充てる)。

5. 各手問賃を上記米価で除すれば米換算手問賃が算出できる。それに賄(上記項2)を上乗せし、一日あたり米換算賃金を得る。
6. 表中の熟練平均系列(列4)および総合系列(列1)は、下記の式にもとづいて算出されている：

$$(4) = (W_{15} \times (2) + W_{ms} \times (3)) / 0.35.$$

$$(1) = 0.35 \times (4) + 0.65 \times (5).$$